

ルーン文字の起源をめぐって

(その1)

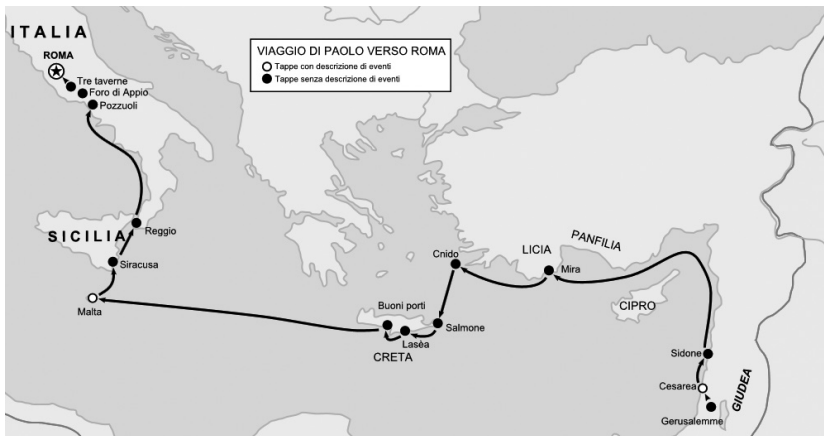
河崎 靖

1. 文化誌的背景

ワーグナー (Richard Wagner, 1813-1883) が『ニーベルングの指輪 Ring der Nibelungen』の中で主な素材としているのは「ヴォルスンガサガ」で、この作品は世界支配の権力の象徴である黄金の指輪をめくり、天界の神々と地下暗黒界の小人の間の闘争を描いている。思想的には、力はキリスト教の愛の前に屈するという立場をとり、キリスト教と異教の宥和をはかっている。ワーグナーの北欧文学への傾倒は相当なもので、自らかなり原典も読めたようである¹。

さて、異教が支配していた北欧へキリスト教が勢いをもって伝播していくのは11～12世紀の頃である。それと同時に、7～8世紀あたりに全盛期を迎えていたルーン文字も²、次第にその地位をラテン・アルファベットに譲ることになる。キリスト教の布教がラテン・アルファベットの普及と相関し、ルーン文字は異教のシンボリック的存在としてだんだん排除されていくのである。この移行の時期、ルーン文字とラテン・アルファベットが同時に彫られた碑文がいくつも発見されている³。ここで、キリスト教がローマ帝国内で広がっていくにつれて⁴、同時に領土内でラテン・アルファベットが浸透していったプロセスを再現してみよう。すなわち、キリスト教がヨーロッパの版図で拡大していくに従い、「パウロ書簡」や初期の「福音書」といった初期キリスト教の文書を根拠に(ユダヤ教的な要素を排除しながら)キリスト教正典の編纂作業、つまり、

文字による文書の記録が始められていくのである。367年に現行の『新約聖書』である27の文書群が初めて示されることとなる⁵。キリスト教文書の最初のものであり、現在の『聖書』の中の「書簡」の中心となる「パウロ書簡」は、パウロの伝道の間（第一次～第三次）に、各地の共同体に宛てて執筆されたものである⁶。また、紀元後70年前後に『聖書』の「福音書」中の最初の文書「マルコ福音書」が書かれたと推定されている。この文書は「イエス伝承」という形式での最初のものであり極めて重要な記録である⁷。パウロの第一次・第二次および第三次伝道のルートは以下の通りである。当時の状況として、パウロはまさに「地の果てに至るまで私の証人となる」という主イエスの言葉を実践した最初の人であった。常に前進を続け、あちこちに教会の基礎を作り、福音の種を蒔き、さまざまな方法で（テント職人として・ローマ市民権所有者として・囚人として）キリストを宣べ伝えた。パウロの宣教は決して華々しいものでも成功に満ちたものでもなかった⁸。最後には囚人としてローマへ送られていく。





パウロの第一回伝道旅行：1. アンティオキア（アンテオケ）・2. セレウキア（セルキヤ）・3. キプロス・3a. サラミス・3b. パフォス（パポス）・4. ペルゲ・5. アンティオキア

パウロの第二回伝道旅行：1. セルキヤ・2. デルベ・3. リストラ（ルステラ）・4. イコニオン（イコニオム・コンヤ）・5. ガラテヤ・6. ミシア（アレクサンドリア・トロアス）・7. サモトラケ・8. ネオボリス・9. フィリピ（ピリピ）・9. アンフィボリス（アムピボリス）・10. アポロニア・11. テサロニケ・12. ベレア（ベレヤ）・13. アテネ・14. コリント・15. ケンクレアイ（ケンクレヤ）・16. エフェソス（エペソ）・17. シリア・18. カイサリア（カイザリヤ）・19. エルサレム・20. アンティオキア（アンテオケ）

このように苦勞して伝道を行ったパウロが各地の信徒に書き送った「書簡」を、文字を学ぶ機会もほとんどなかった多くの人たちはどの程度、理解していたのであろうか。ただ、かえって、こうした人々にむしろ支えられ、励まされ「書簡」が生み出されたとも考えられる。学問をする特権を享受しえたパウロは、彼がなしうることをなしたとも言えよう。



パウロの第三回伝道旅行：1. ガラテヤ・2. フリギア・3. エフェソ（エペソ）・
4. マケドニア（マケドニヤ）・5. コリント・6. ケンクレアイ（クンクレヤ）・
7. マケドニア（再訪）・8. トロアス・9. アソス・10. ミュティレネ・11. キオス（キ
ヨス）・12. サモス・13. ミレトス・14. コス・15. ロドス・16. パラタ・17. ティル
ス（ツロ）・18. プトレマイオス（プトレマイ）・19. カイサリア（カイザリヤ）・
20. エルサレム

一般に、北欧にはゲルマン伝統の神々の神話が保持されている。アイスランドは大陸から遠いため、キリスト教の伝来も遅く、そのためにゲルマンの伝統的精神が保持される傾向にあった。『エッダ』などの中で、キリスト教の影響を受けていないゲルマンの英雄の姿が実際に描かれている。このように北欧神話は、北欧におけるキリスト教化（11～12世紀）以前の現地の宗教、および、アイスランドを含むスカンディナヴィアの信仰・伝説で構成されている。一方、北欧以外のゲルマン人は、比較的早い時期からキリスト教化が進んだため、民族独自の神話・宗教を示すものがほとんど残っていない。加えて、ヨーロッパの基底に想定されるケルト文化について言えば、古代ケルト人の場合、紀元前2000年にはすでに一大勢力を築いていたようである。ゲルマン人に先立ち現在のヨーロッパに展開し、ゲルマン人に大きな影響を与えたのも事実である。ただし、ギリシア・ローマとの相対的關係で、歴史に記述されるようになるのはようやく紀元前6～5世紀頃からである。

2. キリスト教の伝播

キリスト教の成立期を厳密な意味でいつとするかは容易なことではない。しかしながら、ユダヤ教の総本山であるエルサレムとその神殿体制が終焉を迎えた紀元後70年とみなすのは通説にも適い、妥当な視点であろう。いわゆるユダヤ教イエス派が脱皮と独立の時期を迎えたのである。なお、キリスト教の礎を築いたと言われるパウロ自身、イエス自らと同じように、決してユダヤ教から自分を切り離そうとはしなかった。ただ、ユダヤ教の神の新たな啓示に忠実であろうとただけであった。それでも、キリスト教が自立するに当たって、自らが何に根拠付けられた共同体運動なのかを明確にしなければならないこの時期にあって、「福音書」・「パウロ書簡」の編集は必要かつ欠くべからざる作業であった。キリスト教自身の自己のアイデンティティーの確立が急務であっ

たのである⁹。

さて、パウロがエルサレムで民衆に襲われ、ローマ軍に逮捕され、ローマ送りとなったのは紀元後58年の秋ごろである。実際にローマに到着したのは59年春/夏であった¹⁰。「使徒言行録」に書かれているパウロに関する記述によれば、そのいきさつは次のようである。

「使徒言行録」第28章

16節 ローマに入ったとき、パウロは番兵を一人つけられたが、自分だけで住むことを許された。

16 ‘Οτε δὲ εἰσήλθομεν εἰς Ῥώμην, ἐπετράπη τῷ Παύλῳ μένειν καθ’ ἑαυτὸν σὺν τῷ φυλάσσοντι αὐτὸν στρατιώτῃ.

17節 三日の後、パウロはおもだったユダヤ人たちを招いた。彼らが集まって来たとき、こう言った。「兄弟たち、わたしは、民に対しても先祖の慣習に対しても、背くようなことは何一つしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に引き渡されてしまいました。

17 Ἐγένετο δὲ μετὰ ἡμέρας τρεῖς συγκαλέσασθαι αὐτὸν τοὺς ὄντας τῶν Ἰουδαίων· πρῶτους· συνελθόντων δὲ αὐτῶν ἔλεγεν πρὸς αὐτούς, Ἐγώ, ἄνδρες ἀδελφοί, οὐδὲν ἐναντίον ποιήσας τῷ λαῷ ἢ τοῖς ἔθεσι τοῖς πατρίοις δέσμιος ἐξ Ἱεροσολύμων παρεδόθην εἰς τὰς χεῖρας τῶν Ῥωμαίων,

パウロはローマで実質的には軟禁状態であったではあろうが、それでも満2年ローマで宣教活動をしたと「使徒言行録」は述べている。

「使徒言行録」第28章

31 節 全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。

31 κηρύσσων τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ καὶ διδάσκων τὰ περὶ τοῦ κυρίου Ἰησοῦ Χριστοῦ μετὰ πάσης παρρησίας ἀκωλύτως.

ところで、パウロをはじめ当時の使徒たちが用いていたのはギリシア語訳の『旧約聖書』であった。このギリシア語訳『聖書』は一般に「七十人訳聖書」（羅：Septuaginta 「セプテュアギンタ」、 「70」の意）と呼ばれ、紀元前3世紀中葉から紀元前1世紀の間に、ヘブライ語のユダヤ教聖典（つまり旧約聖書）がギリシア語へ翻訳されたのである。この翻訳はキリスト教史にとって重要な文化的意味合いがある¹¹。と言うのも、この時期、広くヘレニズム世界に多くのユダヤ人が居住することになり、もはや母語であるヘブライ語が十分に理解できないユダヤ人が増えてきたからである。ヘレニズム時代・ローマ時代にユダヤ人は各地のギリシア風都市に進出し、その新しい土地に定着して二代目・三代目と代を重ねるごとに、むしろギリシア語を日常語とするユダヤ人がますます多くなってくる。こうした人びとのために『旧約聖書』がギリシア語に翻訳されるに至ったのである¹²。パウロはヘブライ語も読めたようであるが、「書簡」では引用に際してこのギリシア語訳『聖書』を使っている。

こうしたギリシア語圏の拡大、そしてローマ帝国の勃興に伴うラテン語の普及、片や、いわばヨーロッパの辺境に位置するゲルマン語圏（ゴート文字・ルーン文字）での文字文化の発達をヨーロッパ全土を版図に描き、ルーン文字の起源に迫りたい。



1967年にスウェーデンのSAS航空が北極回り航空路就航10周年記念として建てられた石碑（日比谷公園）。ラテン文字に置き換えると skandinauer opnada luftuagen melan iapan vok europa ofer nordpolen den xxiv februari mcmvii ok reste dena sten til hogkomst tio ar senare（スウェーデン語。スウェーデンと日本の間の航路が開拓された記念に）

3. ルーン文字の由来

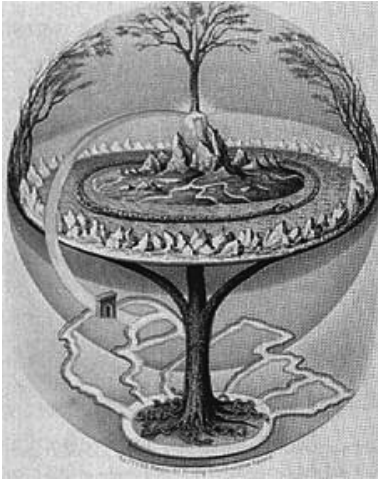
ルーン文字と言えば「ヴァイキングが用いた文字」というイメージがある。現存する碑文の多くは確かにヴァイキングが活躍した中世のものであるが、文字そのものの歴史は中世よりもはるか以前、ローマ帝国の時代にまで遡る。考古学の裏付けもあり、現在わかっている最古のルーン文字は紀元後2世紀のものであると言われている。ゲルマン人がキリスト教化されて、教会が彼らにローマの学問をもたらすまで、彼らは読み書きができない文盲の状態であったというのは（実質的には事実であるとは言え）やや単純化しすぎている。少なくともゲルマン人の一部は、ルーンと呼ばれる彼ら自身の文字体系をもっていたのである¹³。この文字の系譜については種々の議論があるが、一般的に、アルファ

ベット大体系の1変種であると考えられている¹⁴。通常、ゲルマン人側から見ると南方系の影響を受けたとされるルーン文字の素性に関しては、次の引用が示す通り、実は詳しいことはあまりわかっていない¹⁵。

„Die ganaue Herkunft der Runenschrift ist noch immer stark umstritten.“ (Krause 2000:34)

レティア人 Räter, イリュウリア人 Illyrer, ヴェネト人 Veneter 等のアルプス地方の諸民族から伝播したともされるルーン文字ではある。ともかく、基本的に祭祀のための独自の文字体系として発達したのは確かである。この文字体系は古形では24個（新しい時代である、初期のノルド語およびアングロ・サクソン語の変異体では16または26ないし33個）の表音文字から成り立っており、いわゆるラテン・アルファベットのABCをまねて、最初の6文字をとって「フサルク」f-u-th-a-r-kと呼ばれている。

そもそもルーン文字は紀元後2世紀にはゲルマン語を話す古代北欧を中心に広がっていた¹⁶。実際『古エッダ』にルーン文字に関する記述が出てくる。北欧神話の世界では、オーディンがルーン文字を発明したとされており、「オーディンの箴言」の中に「我はルーン文字を読み取り、呻きながら読み取り」という場面があり、これは、オーディンがトネリコの世界樹ユグドラシルに自ら9夜吊り下がり、我が身を槍で傷つけ、この修行によって魔法の文字であるルーンを取得したというシーンである。



学術的な意味で、ルーン文字がどのように発生したのか、その起源については諸説があるだけで、実は未だに神秘のベールに包まれている。確かにラテン・アルファベットと似ているという点から、ローマ帝国の近くに住むゲルマン人によって作成されたという考えや、ギリシア文字・北イタリア文字を基にして生み出されたという説、あるいは、初期のルーン遺物が多く発見されている東ヨーロッパで生まれたとする考え方、など諸説紛々で、定説が確立するには至っていない。

勝利を臨むならば、勝利のルーンを知らねばなりません

剣の柄^えの上か、血溝の上か、剣の峰に彫り、

二度チュールの名を唱えなさい。

信じる女に裏切られたくなければ、麦酒のルーンを知らねばなりません

角杯の上に、手の甲に彫りなさい。

爪にニイドのルーンを記しなさい。

（シグルドリーヴァの歌）

北欧神話では、ルーン文字は主神オーディンが創ったと言われる伝説がある。オーディンがルーン文字を得ることができたのは、宇宙の中心にあるとされる大木ユグドラシル¹⁷ にぶら下がり苦行を経てのことである。北欧神話・英雄伝説の集成『エッダ』に次のような詩がある。

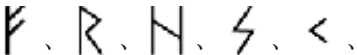
私は知っている 私が
9日9夜にわたって
風吹きすさぶ樹に吊り下がり
槍に傷つき 私自身が
オーディン つまり私自身に
私をいけにえとして
それがいかなる根から発しているか
知るひともない

パンも角杯も
恵まれぬまま
私は下をうかがう
私はルーンをつかみあげた
うめきつつ つかみ
それから大地に落ちた

そして 私は書き始めた

実りが増えて来て 私の知恵も増えて来た
一つの言葉が言葉を生み
それが行ないも呼んだ
そして一つの行ないが多くの行ないを呼んだ

一般的には、ローマのラテン・アルファベットに由来すると考えられている¹⁸。と言うのも、ライン川流域でゲルマン人が紀元後数百年の間にローマ人と交易を重ねていたから¹⁹、というのが通説である²⁰。Düwel (³2001) も次のように述べ、こうした考え方を支持している²¹： „Die Runenschrift wurde auf der Grundlage eines mediterranen Alphabets, am ehesten des lateinischen, in der Zeit um Christi Geburt bis ins 1. Jahrhundert n.Chr. hinein im westlichen Ostseeraum.“ さらにローマのラテン・アルファベットのその元を辿れば、古代イタリアのエトルリア文字に遡ることになる。紀元前7世紀の頃、栄えていたエトルリア（紀元前3世紀にローマに制圧される）は、アルプスを越えて来襲したキンブリー族などゲルマン系の民族との接触もあったであろう。これら北方のゲルマン人にエトルリア人から直接、文字が伝わった可能性は十分あり得ることである²²。もっとも、ラテン文字は一般的にエトルリア文字を仲介として、間接的にギリシア文字を継承したものである²³。およそ現在のラテン文字が確立するのは紀元前3世紀頃と想定される。ルーン文字がラテン文字に基づくという説は、L.F.A.Wimmer らによって提唱された。

このラテン文字由来を唱える説とは、いくつかの文字の形状がラテン文字とルーン文字の間で類似しているという点に基づいている。すなわち、ルーン文字  はラテン文字大文字の F、R、H、S、C に由来するというものである。この学説に基づけば、ルーン文字は徐々に

発達したものではなく、4世紀のゴート文字と同様、西ゴート人の司教ウルフィラ（Wulfila）のようなある個人によって作られたものとみなされる²⁴。

ここで言われている学説（ラテン文字説）と並んで、従来、注目されて来たテーゼとして、ギリシア文字説、および、北イタリア文字説がある。ギリシア文字説では、ルーン文字の起源にはゴート人が関わっているとされ、ギリシア語・ラテン語の両方を十分にこなすゴート人の傭兵によって生み出されたのだと考えられる（3世紀頃、黒海あたりで）²⁵。その後、今のスカンジナビア方面に向かって広まっていったと想定されている。

ルーン文字の起源をめぐって（その1）

エトルリア文字	北イタリア文字	ルーン文字	前ルーン文字	ラテン文字
𐌆 v	F	𐌆 f		F
YV	Λ I V U	𐌆 Λ u	Δ	V
	B	𐌆 𐌆		D d
A	𐌆 Λ 𐌆 Λ A	𐌆 a		A
𐌆	𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 r		R
>c 𐌆k	< C k	< k		< c
		X g	x	X x
	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 w		
𐌆	𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 h		H
𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 n	+	N
𐌆	𐌆	𐌆 i	𐌆	I
		𐌆 𐌆 j	𐌆	G g
		𐌆 𐌆 é	𐌆	
𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 p		P
𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 z	𐌆 𐌆	Z
𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 s		S
𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 t	𐌆	T
	B	𐌆 b		B
𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 e		E
𐌆 𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 m		M
𐌆	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 l		L
𐌆 q		𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 𐌆	
	𐌆 𐌆	𐌆 d	𐌆	
	𐌆 𐌆 𐌆 𐌆	𐌆 o	𐌆	O

R.W.ELLIOTT RUNES AN INTRODUCTION

TABLE 1 Runes and North Italic letters

4. 「北イタリア文字」説をめぐって——スイスの言語状況を中心に——

現在のスイス・イタリアの山岳地帯に広がる「レト・ロマンス語」語圏あたりの先住民については決定的なことはほとんどわかっていない。このレト・ロマンス語は、少数言語でありながらも根強い文化基盤を有しており、およそ2000年もの間、独自の歴史を誇っている。レト・ロマンス語のうち、スイス連邦内の言語はロマンシュ語と称される。「レト・ロマンス語」の一部を形成する「ロマンシュ語」（スイス連邦の新憲法（2000年）の第4条でも「ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語を国語と規定する」と定められている）とは、スイスで話されているレト・ロマンス系諸方言（*Idiome*、通常「方言」と呼ばれるものはロマンシュ語ではこのように *idiom* と称される）の総称である。行政区でいうとグラウビュンデン（Graubünden = GR）州に限られ、州内の5つの溪谷ごとに5つの言語態が並存している。GR州では、1つのコミュニティに1つの言語という領域性原理は機能していない。つまり、〈ドイツ語圏〉：ドイツ語のみ、〈ロマンシュ語圏〉：ロマンシュ語・ドイツ語、〈イタリア語圏〉：イタリア語・ドイツ語・ロマンシュ語といった使用状況である。スイス連邦全体では今日、ドイツ語（490万人）・フランス語（150万人）・イタリア語（50万人）およびロマンシュ語（3万8千人）の4つが「国語」となっている。連邦憲法（第116条）でスイス連邦の「公用語」はドイツ語・フランス語・イタリア語であるとされていたが、1996年の国民投票でロマンシュ語も公用語の地位が認定された（賛成率76%）。スイスの国語・公用語であり、スイスの文化に少なからず貢献している。アルプス山中のロマンシュ語圏の文化は、その溪谷と山が多い地理的条件、独特な歴史がその言語に強く影響を与えていることで知られている。1970年代以降、いわば人工的に統一的な正書法を作り、共通の文語を作り上げようとする動きがある。グラウビュンデン（GR）州で公用語とされ、学校教育の現場へ導入されようとしているロマ

ンシュ・グリシュン（Rumantsch Grischun）である。ただ、ロマンシュ語の各方言話者は「グリシュン・ロマンシュ語」を受け入れようとはしていないというのが現状である。すなわち、現実的に差し迫った課題として、日常的な言語使用の場面（例えば、学校・メディア等）で、どの言語・方言を用いるか、おのおの話者個人レベルで決めなければならないという問題がある。実際には、ロマンシュ語の各方言（Idiome）の話者が5つの方言域の独自性に拘らず、大同団結して進まなければロマンシュ語の行く末は望めないかもしれない（世界の他の地域の少数言語の生き残りを賭けた戦いに鑑み、社会言語学的に見ると、この帰結は自然なものであると言わざるを得ない。言ってみればエスペラント語（ラテン語あるいは東欧の諸言語を軸に人工的に作られた言語）のような余裕はないのである。スイス連邦外のイタリア・アルプスに、レト・ロマンス語系のラディン語・フリウリ語が分布している）。イタリアとスイスのレト・ロマンス諸言語の共通性の問題は未だ議論的となっている（Blättler 2007:7-9）。レト・ロマンス諸言語の総称は「レツィア語」と言われている謎の基礎言語に由来する（Deplazes 1987:10）ののだが、1990年代にレツィア民族の同質性を疑う見方（Wanner 2012:79）も提出され、そのような基礎言語の存在も問い直すべきであると考えられる。政治的にも、イタリアとスイスにおけるレト・ロマンス諸言語は本来、別々であったため、全く違う風に発達してきた。最も話者数が多いレト・ロマンス言語は、北伊の Friuli Venezia Giulia 州にて 60 万人以上が話すフリウリ語（Furlan）である（Blättler 2007:130-40）。さらには、南チロル州におけるドロミテ語があるのだが（Gross 2004:14）、いずれも明らかにイタリア語とは異なり、話者のアイデンティティーにとって重要という社会的地位はあるものの、行政では全く、また学校教育でも微かにしか使われていない（Blättler 2007:91）。イタリアのレト・ロマンス諸言語は 1999 年の 482 号法律により、守るべき少数言語として国家によって認識されるようになったのだ

が（Maraschino und Robustelli 2011: 76）、それでも未だに弱い立場にある。ドロミテ語は、政治的に分裂しており（また自分たちの政治的代表がないため）特に立場が弱い。それでも、ポスト・コロニアルのヨーロッパは少数民族や言語の理解が深まっており、北イタリアのレト・ロマンス語圏の人たちも積極的に自らの文化を育てようとしている（Blättler 2007）。

さて、レト・ロマンス語と言う際の「レト」は、ケルト系のレト族が住む土地「レティア」という名に由来するとはよく言われるところである。しかしながら、その詳細はそれほど明らかではない。現在のスイス・グラウビュンデン州に当たる地域周辺に、紀元前、つまりローマ時代以前、どのような民族が生活していたかは今でも謎である。ロマンシュ語に残っている、ラテン語にも由来せずゲルマン語にも由来しない語が少なからずあり、ローマ時代以前の言語文化を復元する作業は困難を伴う。例えば、次のような記述もある。

「レティア人はエトルリア人の子孫であり、ガリア人によって追い立てられた際、その大将レトゥスの下でアルプス山脈の奥へ逃げ込んだと思われる。[…] レティア民族の中ではヴェンノネーシ族とサルネーティ族がライン川の泉の辺りにおける[…]。」

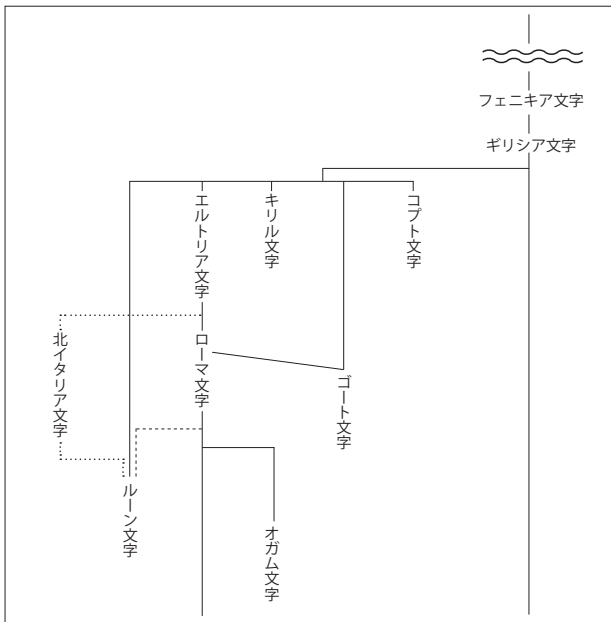
古代ローマの自然科学者の1人として有名なガイウス・プリーニウス・セクンデウスの文献に、このような「山の民族」レティア人について書かれている。実際、レティア人についてさまざまな説がある。これまで長い間、単一の民族で、ケルト人あるいはセム系民族であったのであろうという仮説があった。古代にアルプス山脈で生活していたと思われるこの民族は、東アルプスの諸民族の先祖と想定されていた²⁶。ただ、最新の研究によると、「レティア人」は、単一の民族ではなく、文化的にも政治的にも関連性が極めて低い諸民族の総称

であったのではないかとされている（Wanner 2012: 79）。したがって、スイス・北イタリアのレト・ロマンス語の由来を巡る議論も未だ片が付いているわけではないのである。いずれにせよ、レト・ロマンス語の背景に非ラテン語的な要素があることは確かである。考古学的にも、北の地域やスルセルヴァ谷においてケルト文化の遺跡が、南に向かう谷においてゴラセッカ文化（Golasecca）の遺跡が、そしてエンガディン地方においてレティア文化の遺跡がいくつか見つまっている（Deplazes 1987:3-10）。このように、レティア人の言語に関しては今日に至ってもあまりにデータが乏しく、どの語族に属するのかさえ判断がついていない。印欧語族ではないのではなく、セム語族に属するとする説もある（Deplazes 1987:13）。レティア人の真相はこのように今なお明らかにされていない。

また併せて、エトルリア語についても、その詳細はほとんどわかっていないのが現状である。ただ、エトルリア語もしくはエトルリア人²⁷の起源は不明であるとしても、今日、知られているエトルリア文明はイタリアの土壌で発達したことは疑いない。つまり、中部イタリアのある集団が有史以前の青銅器時代末から鉄器時代を経て歴史時代に、自らの固有の文化・社会・経済をもったエトルリア人として知られる民族へと変容したのは確かである²⁸。エトルリア語の言語文化に関し、確実に言えるのは次の諸点である。

- ①エトルリア語の文字はアルファベット大体系中の1変種にすぎないが、今日、世界で広く使われているラテン文字の形成に一役買った文字である。
- ②エトルリア語は今のところ既知の特定の語族と結びつかず、その結果として、この言語で書かれた銘文が十分には解読されていない。
- ③エトルリアの文献で今日まで伝わるものは1つもなく、手に入る古代の資料はギリシア・ローマの文人の著作のみである。

海洋民族エトルリア人は紀元前7・8世紀にギリシア人・フェニキア人の貿易商と覇を競っていた。ギリシア人・ローマ人は、エトルリア人を海賊（交易を行いつつ機会があれば競合者の船や居住地を襲う海洋の民）として記している。実際、エトルリア人は、ギリシア人と、西方の人びと（バルバロイ）との間の中心的な仲介者としての役割を果たしつつ、都市の文化（＝書字術を含む文明）をイタリアをはじめとするヨーロッパの多くの地域の民にもたらししたのである²⁹。併せて、エトルリア人は、カルタゴの住人であるフェニキア人と商業・政治の面で同盟関係にあり、フェニキアからの影響はエトルリア文化・芸術・宗教にとって重大であった³⁰。



ローマ文字の場合の接触場所→ライン川

ギリシア文字の場合の接触場所→黒海

北イタリア文字の場合の接触場所→北アルプス³¹

5. ルーン文字に関する先行研究における議論

„Die Reihenfolge der Runen im älteren Futhork gilt als eins der ungelösten Probleme, die sich mit diesem Schreibsystem verbinden.“ (Vennemann 2009:857)

ローマの文化とは深い森を隔て、北方の地に住んでいたゲルマン人³²。どうしても、こんなイメージが先行するが、ゲルマン民族のうち、いくつかの部族は北方から黒海沿岸に移り住んでおり、大西洋から黒海までの広い範囲でローマ帝国はゲルマン人と国境を接していた。確かに、ローマ人と盛んな交易があったことは事実であろうが、こと文字に関しては実は詳しいことは未だにあまりわかっていない。古くスカンディナヴィアにラテン文字がもたらされる前に広く使用されていたルーン文字、この由来について今なお確定的なことはほとんど言えない³³。従来の先行研究全体を捉えてみても、岡崎（1999:6）の言うように「ルーン文字創造の場所、母体、時代などを問うての、ルーン文字の起源の問題は、相変わらず未解決と言わざるをえまい」というのが現状であり、特に文字の配列に関して「配列の順序がギリシア語やラテン語のそれと異なる説明を幾度か試みられたが、いずれも説得力に欠けるものばかりであった」（岡崎 1999:7）と見られている³⁴。ルーン文字の配列はギリシア語やラテン語のアルファベットの文字配列（つまり ABC 順）とは合致しない。



最初の6つのルーンから「f、u、th、a、r、k」（フサルク）と呼ばれる。

いかにも呪術的な面ばかり強調される（実際そうした用法が他の文字体系に比べて少なくなかったというのも確かであるが）ルーン文字（考古学の記録では紀元後3世紀に初めて登場）も、実際の生活場面で日用的な用いられ方をすることも通常であったのである³⁶。

ウルフィラがギリシア語『聖書』をゴート語に翻訳した際³⁷、27文字からなるゴート文字を作り出した。このうち20文字はギリシア文字から、5文字はラテン文字から、2文字はルーン文字から取り入れたと言われている。ウルフィラは「マルコによる福音書」の中の「神の王国の神秘」（4章11節）を、*rūna þiudangardjōs guþs* と表現している。ルーンという語自体に「神秘・秘密」という意味合いが含まれていた例証である。この語は、ゲルマン語からケルト語に受け継がれ、古アイルランド語とスコットランドのゲール語で *rūn* 「秘密」として、ウェールズ語では *rhin* 「秘密」として伝わった。また、さらにフィンランド語に *runo* 「歌」として借用された。

最初期のごフサルク（24文字）の言語（紀元2世紀頃）、つまりルーン・ノルド語は非常に原始的なゲルマン語で、多くの点でゴート語より古風である³⁸。この言語形態・文字体系からルーン文字の起源について推察したウォル

シュ（1990）も「ルーン文字の正確な起源は完全には明らかではないが、それらの文字は黒海沿岸のゴート族あるいはたぶんボヘミアを占領したゲルマンの部族マルコマンニ族の間で発達したようである。元になったのはギリシア文字かラテン文字で、可能性の強いのは北イタリアの文字らしい」という妥協的な結論付けしかできていない³⁹。

参考文献

- シャルル・イグーネ / 矢島文夫訳（1956）：『文字』白水社文庫クセジュ
クリストファー・ウォーカー / 大城光正訳（1995）：『楔形文字』學藝書林（大英博物館双書）
小野寺幸也（1982）：『文字の歴史——中近東における起源と発達——』中近東文化センター
A. ガウアー / 矢島文夫訳（1987）：『文字の歴史——起源から現在まで——』原書房
岡崎 晋（1999）：「ルーン文字とそのメッセージ」『言語共同研究所紀要』（学習院大学）第23号
加藤一朗（1962）：『象形文字入門』中公新書
ルイジャン・カルヴェ / 矢島文夫監訳・会津洋・前島和也訳（1998）：『文字の世界史』河出書房新社
E. キエフ / 板倉勝正訳（1958）：『粘土に書かれた歴史——メソポタミア文明の話——』岩波新書
C.H. ゴードン / 津村俊夫訳（1979）：『古代文字の謎——オリエント諸語の解説——』現代教養文庫
ジョルジュ・ジャン / 矢島文夫訳（1990）：『文字の歴史』創元社
杉勇（1968）：『楔形文字入門』中公新書
世界の文字研究会（2009）：『世界の文字の図典』吉川弘文館
ジョン・チャドウック / 細川敦子訳（1956）：『線文字B——古代地中海の諸文字——』學藝書林（大英博物館双書）
E. ドーブルホーファー / 矢島文夫・佐藤牧夫訳（1963）：『失われた文字の解説Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』山本書店
西田龍雄（1981）：『世界の文字』講座言語第五巻、大修館書店

- 日本聖書協会（1999）：『バイブルアトラス』
- カーロイ・フェルデシ=パップ / 矢島文夫他訳（1988）：『文字の起源』 岩波書店
- ジョン・ヒーリー / 竹内茂夫訳（1995）：『初期アルファベット』 學藝書林（大英博物館双書）
- モーリス・W・M・ポーブ / 唐須教光訳（1982）：『古代文字解読の物語』 新潮社
- モーリス・W・M・ポーブ / 唐須教光訳（1995）：『古代文字の話——エジプト象形文字から線文字 B まで——』 講談社学術文庫
- A.C. ムーアハウス / ねずまさし訳（1956）：『文字の歴史』 岩波新書
- 矢島文夫（1977）：『文字学のたのしみ』 大修館書店
- ステファヌ・ロッシーニ / 矢島文夫訳（1988）：『古代エジプト文字入門』 河出書房新社
- Bundi, Martin. 1982. *Zur Besiedlungs- und Wirtschaftsgeschichte Graubündens im Mittelalter*. Chur: Claven-Verlag.
- Blättler, Jana. 2007. *Kleinsprachen und Sprachstandardisierung*. Champfèr: Eigenverlag.
- Camathias, Flurin: „Nossa viarva“, in: *Annalas retoromantschas* 1907 (vol. 21), S. 127-8.
- Cathomas, Bernhard. 2012. “Sprachen fallen nicht vom Himmel. Zur Sprachplanung in der Rätoromania”. In: Wanner Gerhard und Jäger Georg (Hg.): *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur: Desertina, S. 125-50.
- Clavadetscher, Otto Paul. 1994. *Rätien im Mittelalter*. Disentis/Sigmaringen: Desertina.
- Collenberg, Adolf und Gross, Manfred. 2003. *Istorgia Grischuna*. Cuira/Chur: Lia Rumantscha.
- Darms, Georges: ”Sprachnormierung und Standardsprache“, in: Holtus, Günther; Metzelen, Michael; Schmitt, Christian (ed.), *Lexikon der romanistischen Linguistik*, Vol. III, Tübingen, Max Niemeyer, 1989:827-853.
- Dazzi, Anna-Alice. 2012. „Verschiedene Aktivitäten der Lia Rumantsch zur Erhaltung und Förderung des Romanischen“. In: Wanner Gerhard und Jäger Georg (Hg.): *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur: Desertina, S. 117-24.
- Decurtins, Alexi. 2001. *Niev vocabulari romontsch: Sursilvan-Tudestg*. Chur: Legat Anton condrau.
- Deplazes, Gion. 1987. *Funtaunas. Istorgia da la litteratura rumantscha per scola e pievel. Tom 1: Dals origins a la refurma*. Cuira/Chur: Lia Rumantscha.
- Dtv-Atlas Deutsche Sprache. 2007. München: dtv.

- Furer, Jean-Jacques. 1999. „Graubünden, von der Dreisprachigkeit zur deutschen Einsprachigkeit. Eine traurige Ausnahme in der Schweizer Praxis“. In: Dieter Kattenbusch (Hg.): *Studis Romontschs. Beiträge des Rätoromanischen Kolloquiums (Giessen / Rauischholzhausen, 21.-24. März 1996)*. Wilhelmsfeld: Gottfried Egert.
- Furer, Jacques. 2005. *Volkszählung 2000. Die lage des Romanischen*. Bern: Bundesamt für Statistik.
- Gross, Manfred. 2004. *Romanisch. Facts & Figures*. Chur: Lia Rumantscha.
- Kraas, Frauke. 1992. *Die Rätoromanen Graubündens. Peripherisierung einer Minorität*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Liver, Ricarda. 2009. „Deutsche Einflüsse im Bündnerromanschen“. In: M. Ementaler (Hg.) *Deutsch und seine Nachbarn*. S. 133-148.
- Nicoletta, Maraschio und Cecilia, Robustelli. 2011. „Minoranze linguistiche: la situazione in Italia“. In: Stickel Gerhard (Hg.): *National, Regional and Minority Languages in Europe*. Frankfurt am Main: Peter Lang, S. 73-80.
- Mayr, Ulrike. 2012. „Von der Spätantike zum Mittelalter. Romanen und Alamannen im Alpenrheintal – ein Konflikt der Kulturen?“ In: Wanner Gerhard und Jäger Georg (Hg.): *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur: Desertina.
- Valär, Rico Franc. 2012. „Wie dir Anerkennung des Rätoromanischen die Schweiz einte. Einige Hintergründe zur Volksabstimmung vom 20. Februar 1938.“. In: Wanner Gerhard und Jäger Georg (Hg.): *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur: Desertina, S. 101-16.
- Wanner, Gerhard. 2012. „Räter und Rätoromanen in der Geschichtsschreibung Vorarlbergs“. In: Wanner Gerhard und Jäger Georg (Hg.): *Geschichte und Gegenwart des Rätoromanischen in Graubünden und im Rheintal*. Chur: Desertina, S. 69-100.

註

- 1 谷口幸男（1976）『エッダとサガ』新潮選書。
- 2 現存しているルーン遺物は 5000 点程度である（その大多数がスウェーデンにある）。
- 3 藤森緑（2013）『ルーン・リーディング』魔女の家 BOOKS.

- 4 竹内茂夫：「布教の中で自分たちのラテン文字を各地に普及させていったと考えることができます」 in 『ニュートン』（2008）5月号、22頁。
- 5 アレキサンドリアのアタナシウスによる。397年の第3回カルタゴ会議で正式に認められ、初期キリスト教以来350年ほどたって規範が形成されたことになる。
- 6 パウロの伝道（第三次）：ついにローマにまで及ぶ。
- 7 キリスト教が地中海世界に広まっていくプロセスの中『新約聖書』を記した言語はギリシア語であった。『新約聖書』の「マタイによる福音書」（5-18）にイエスのことば「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます」がある。この箇所はイエスが読んだ『旧約聖書』の文字（方形ヘブライ文字＝現在のヘブライ語印刷文字の原型）に関係している。その「一点」とは最小文字ヨードのことで、また「一画」とは文字によっては左上に角状飾りのことである。
- 8 石をもって追われ（リストラ）、投獄され（フィリピ）、暴動を起こされ（テサロニケ）鼻であしらわれる（アテネ）ものであった。
- 9 佐藤研（2003:144f.,152）『聖書時代史 新約篇』岩波現代文庫。
- 10 パウロが皇帝に上訴する権利を持ち合わせていたのは、彼がローマ市民権を有していたからである。
- 11 『新約聖書』の中には『旧約聖書』から引用する際、この訳を用いている場合が多い。『聖書』（新・旧）のラテン語訳で名高いヒエロニムス（紀元後5世紀）も旧約の翻訳の際に、この「七十人訳聖書」を基本としている。
- 12 古く紀元前6世紀の「バビロン捕囚」頃からユダヤ民族が東方への離散を余儀なくされ（＝ディアスポラ διασπορά）、あるいはその他のさまざまな機会に強制的であれ自発的であれパレスチナの外にユダヤ人が移り住むようになった。ヘブライ語を読めないギリシア語圏のユダヤ人、あるいは、改宗ユダヤ人が増えた。いわゆる「ディアスポラ」のユダヤ人はヘレニズムに先行するが、ギリシア語話者ユダヤ人（ヘレニスト）は、アレキサンダー大王の遠征以降、一層増加したと思われる。各民族語で書かれた文書が多数、ギリシア語へ翻訳される中で、『旧約聖書』もギリシア語に翻訳されたのである。
- 13 ルーン文字は何よりもまず木に彫ることを目的とし、それに適った特徴をもっている。

- 14 ページ（1996）『ルーン文字』菅原邦城 訳、學藝書林。
- 15 Krause (2000:36) : „Nachdem bereits K. Weinhold in seinem klassischen Buch „Altnordisches Leben“ (1856) an die Herkunft der Runen aus einem etruskischen Alphabet, wenn auch ohne jede nähere Begründung, gadacht hatte, versuchte der norwegische Sprachwissenschaftler und Keltologe Carl J. Marstrander (1928) den Nachweis zu führen, daß die Runen von einem nordetruskischen Alphabet abstammten, das seinerseits aus einem altgriechischen Alphabet entwickelt war. Die verschiedenen Gruppen dieser nordetruskischen Alphabete finden sich in Inschriften aus dem südwestlichen, südlichen und östlichen Alpenvorland aus der Zeit etwa vom 5. Jh. v. Chr. bis in den Anfang des 1. Jh.s n. Chr. Völker verschiedener Sprachen bedienten sich dieses Alphabetes: Kelten, Etrusker und Germanen.“
- 16 最古のルーン遺物はユトランド半島で発見されたブローチ（西暦1世紀）である。
- 17 巨大なトネリコのことで9つの世界を支えているとされている（9はゲルマン人の世界で神聖な数である）。
- 18 コムリー（1999:190-191）：「フサルクの発達に力を与えたのは、おそらくラテン・アルファベットであったと思われる。
- 19 谷口（1971:125）：「1700年頃のルーネ […] は、fuparkの順序も失われ無残なほどラテン文字の攻撃にさらされ、昔日のfuparkの面影はない」とし、文字体系として「ラテン文字がすっかりルーン文字と同居した感じがする」と述べている（広島大学文学部紀要）。
- 20 クリスタル（1992:288）
- 21 Düwel, K. (2001): Runenkunde, Metzler.
- 22 小塩（2008:17）
- 23 <http://www.runsten.info/runes/german/origin.html>（2013年12月現在）
- 24 <http://www.runsten.info/runes/german/origin.html>（2013年12月現在）：E.Moltkeもこの説を支持している。彼はルーン文字のフサルクの並び方は重要でないと退けている。ルーン文字は左から右また右から左というように牛耕式という交互の方向に書かれるものであるが、この点も問題視していない（ラテン文字は一貫して左から右に書かれる）。
- 25 <http://www.runsten.info/runes/german/origin.html>（2013年12月現在）を参照のこと。
- 26 このテーマについては Wanner（2012）を参照のこと。

- 27 ギリシア人からはテュレニア人 Tyrrhenoi と呼ばれていた。
- 28 エトルリアの都市はその1つ1つが固有の性格・様式・独自性をもっており、エトルリア帝国などというものは一度も存在していない。
- 29 ギリシア人は、エトルリア人の支配下にあったイタリアの豊かな鉱物資源（鉄・銅）に惹かれて西方の植民地化を開始した。
- 30 ボンファンテ 1996『エトルリア語』小林標 訳、學藝書林
- 31 北欧へのキリスト教の伝播は11～12世紀に早いペースで進んだ。11世紀頃のものと思われる、北欧の本来の自然信仰の墓地と並んで、キリスト教の墓地の跡が発掘されている。この頃が、昔からの信仰とキリスト教の共存した時代なのだろう。
- 32 古ノルド語の表記はルーン文字が使われ、それゆえ2世紀～11世紀にかけて多くのルーン文字の石碑が残されている。
- 33 Heinz, U.J.(1987) Die Runen Hermann Bauer Verlag より；Heinz (1987:19) : „einige Forscher allerdings behaupten, sie (ルーン文字) sei abgeleitet und nicht eigenständig gewachsen oder von einem Angehörigen der nördlichen Völker >erfunden<. Diese Ansicht ist allerdings [...] falsch. Richtig ist, daß mit Runen selten Texte geschrieben wurden.あるいは Heinz (1987:42) : „Der mythische Hintergrund der germanischen Götterlehre ist allgemein wenig bekannt. Hier werden oft klischeehafte Vorstellungen aus dem dichterischen oder musikalischen Bereich für die religiöse Wirklichkeit selbst genommen. Diese Wirklichkeit läßt sich für einen gemeingermanischen oder nordischen Raum nicht mit Sicherheit festlegen. Unsere Zeugnisse stammen fast alle aus der Zeit, als die Völkerwanderung fast abgeschlossen war, die Christianisierung schon begonnen hatte und sich die einzelnen Stämme oder Völker wesentlich auch räumlich voneinander entfernt hatten.“
- 34 Duwel (⁴2008:7) : „Die im großen und ganzen festliegende Reihenfolge der Zeichen entspricht nicht der aus dem Griechischen und Lateinischen bekannten Alphabetfolge.“
- 35 コムリー (1999:190-191) : 「最も初期のルーン文字の記号体系は24文字で構成され、f-u-th-a-r-k と呼ばれるアルファベット順に並べられており、その文字記号の特徴は垂直な線と斜めの線である」。
- 36 このゴート語『聖書』はウブサラ大の図書館の展示室で見ることができる。
- 37 ウォルシュ M. O' C. 薮下 紘一 訳 (1990:19) 「北欧語入門」北海道大学図書：「後

に8世紀頃、音変化が起きて16文字に縮小したルーン文字（新フサルク）は主に日常生活で使われた」。

38 ウォルシュ, 薮下 紘一 訳 (1990:18) 「北欧語入門」北海道大学図書。